



夢追人VI

かとう学園 宗像市立河東中学校
学校通信第48号(R5. 3. 1)

やよい つばめ
弥生ついたち、はつ燕、
か
海のあなたの静けき国の
たより ふみ
便もてきぬ、うれしき文を

<燕の歌 ガブリエレ・ダンヌンチオ 上田敏の訳詩集『海潮音』より>
弥生ついたちというのは、3月1日のことです。春到来を歌ったものです。海の向こうから渡ってくるツバメになぞらえて、うれしい便りとして春のおとずれを表現したものです。『海潮音』は、上田敏が翻訳したヨーロッパの詩集です。ダンヌンチオはイタリアの詩人で、この詩も上田敏の名訳の一つです。日本人が昔から耳と心に心地よい5音と7音ですべて訳されているのはすごいですね。

今日から3月。弥生の月です。弥生の「弥」はいよいよ・ますます、「生」は草木が芽吹くことをあらわします。弥生とは、草木がだんだんと芽吹く時期を意味します。また、3月は別れと旅立ちの月でもあります。卒業式まであと10日となりました。9年生は、あとわずかで本校を巣立ち、それぞれの道へと歩いていきます。9年生にとって、残された一日一日はかけがえのないものでしょう。

一週間後に公立一般入試を受検する人たちは、今まで本当によく頑張ってきました。最後の仕上げまでしっかりやり抜いてください。

最近の9年生を見ていて感じることが一つあります。今年は例年以上に2月までに進路先が決まった生徒が多くいます。私立専願・北九州私立推薦、公立特色化選抜、公立推薦での志望校合格者です。その人たちの授業に臨む姿勢がしっかりしていることに感心し感謝しています。最後まできちんとしようという態度と公立一般入試を受検する仲間のことを考えているのは見ていてわかります。中には、放課後残って掃除や机並べをしてくれている9年生もいます。目標を達成した後の人間は難しいと言われます。達成感の中で、ほっとするし燃え尽きる次の目標設定は簡単ではありません。そんな中で、耳に心地よい「仲間のために」と言われても本当は難しいことです。しかし、9年生は自分の進路が決まっても、最後までやるべきことをやり、次のステージに向けて一途に準備する姿に心が打たれます。

授業研修の風景

安部先生(国語)

賀門研究主任を中心とした研究推進委員会で進めてきた本年度の授業研修も残りわずかとなりました。先生たちの授業力向上はこれからもまだ進みます。

安部先生が9年生のためにつくった最後の単元。—それは「俳句の鑑賞プレゼン」俳句の魅力や自分の考えをスライドと言葉で伝える授業。9年生は一人一人タブレットで見事なプレゼンスライドを制作していました。



9年2組で公開された国語の授業。この授業の素晴らしいところは、芭蕉や蕪村の句ではなく、9年2組のメンバーがつくった俳句の中から1つを選んで、季語や表現技法・共感できる点をしばってプレゼンにまとめたところ。4人班で発表し、班の代表が全体発表をしました。発表内容・説明力の良さに、まさに学習の集大成を感じました。

廣渡先生(音楽)

特別支援学級・けやき学級でおこなわれた音楽の授業。音楽の3要素であるリズム・メロディ・ハーモニーのうち、リズムを重視した授業が行われました。

デジタル教科書を活用した音楽の授業。プリントに音符と休符を書いた後、タブレットの譜面に置き換えると電子音でリズムがきざまれます。いくつか自分の気に入ったリズムを作成し、手で打って確認します。その作業ができるようになって、本時の仕上げとして4小節分のリズムを全員作成することができました。



ヘレン・ケラーがリスペクトした日本人 ～ 目が見えない日本人が残した偉大な業績とは？ ～

世界中の人から「奇跡の人」と呼ばれたアメリカ人ヘレン・ケラー。彼女は、世界中の障がい者福祉の向上に貢献しました。目が見えず、耳が聞こえず、しゃべれないという三重苦を克服して成長する生き様に世界中の人が感動し勇気をもらいました。彼女が1912年に来日した時、講演でこう語りました。「…幼い時から、母から先生のことを聞かされて育ちました。そしてこの日本の盲目（もうもく・目が見えない）の偉人を心から尊敬し、人生の目標としてきました。…」



さて、ヘレン・ケラーがリスペクトした日本人っていったい誰なのでしょう？それは、江戸時代の後半に活躍した塙保己一（はなわ ほきいち）という

学者です。彼は、古代から江戸時代にかけての日本の文学作品や歴史書を整理し、『群書類従』（ぐんしよるいじゅう）としてまとめました。ばらばらになっていた1270の日本の古典を665冊に整理したわけです。例えば、かぐや姫で有名な『竹取物語』はそれまで異本が5種類ありましたが、保己一が丹念に調べ綿密に校訂して1つにまとめました。

では、保己一の生涯を簡単にたどります。塙保己一は、1746年現在の埼玉県で生まれます。5歳の時、胃腸系の病気にかかり次第に視力を失って、7歳で失明します。ちなみに、当時長崎で医学を教え治療したオランダ医ポンペの記録を読むと、江戸時代の日本人は世界一眼病が多く、失明する者が多いと書いてあります。鎖国で西洋医学を閉ざし、まじない程度の医療しか施さなかった日本では眼病の悪化により失明する割合が高いと記しています。

そこで当時の日本は目の見えない人が集まって相互扶助組合をつくっていました。保己一も盲人一座に入り、あんまやはり、三味線などの芸能などを習い身を立ようとしませんが、うまくいきません。唯一、保己一が生きていけるのは、学問・勉強の世界でした。保己一の学問への情熱はすさまじかったといえます。目が見えない保己一は、誰かに本を読んでもらうしかありません。全身を耳にし、耳にしたことはすべて吸収するという意気込みでした。10代の保己一は、目の見えないという弱点を耳と脳の訓練強化によって克服していきました。

やがて、保己一の真剣な姿に多くの援助者が現れます。そして弟子たちと力を合わせて40年の歳月をかけて『群書類従』を完成させます。この文献が後の日本史研究や文学研究に果たした役割は限りなく大きいものがあります。後の世の人のため、一つ一つの書籍・資料を丁寧に検討し、まがい物は絶対に収めない。それが保己一の信念でした。

人間に限らず生物には、失われた細胞や器官を別なもので補完しようとする作用が働きます。目が見えない人が、聴覚などが発達するのはある意味で自然なことです。生物学上の弱点を他の細胞や器官で強化することは、生きるための自然な知恵であるわけです。それが自然に行われる場合もあるし、人間は意識的にそのように働きかけをします。これは、細胞や器官に限ったことではなく、人間の能力や性格でもそうではないでしょうか。一見、自分の弱みと思えることも、方法によっては補完したり別の力で総合的により強い力にしたりすることができるわけです。保己一の一生は、そのことを証明していると言っていいでしょう。

戦前の日本の小中学校の教科書には塙保己一が様々に取り上げられていました。その中から、戦前の小学4年生の国語の教科書の一部を紹介します。

「塙保己一は、七歳の時目が見えなくなりしが、人に書物をよませて、一心にこれを聞き、後には名高き学者となりて、多くの書物をあらわせり。保己一の家は今の東京、そのころの江戸の番町にありて、多くの弟子保己一につきて学びたり。ある夜弟子を集めて、書物を教えし時、風にわかにかきて、ともし火消えたり。保己一はそれとも知らず、話を続けたれば、弟子どもは『先生、少しお待ちください。今風で明かりが消えました』と言いに、保己一は笑いて、『さてさて、目が見えるものというものは不自由なものだ』と言いたりぞ」

ヘレン・ケラーのお母さんは、ヘレンが小さいころこう言って励ましたそうです。「日本には幼い時に失明し、点字もない時代に努力して学問を積み、一流の学者になった塙保己一という人がいた。あなたも塙先生を手本にがんばりなさい」

（参考文献『私の生涯』ヘレン・ケラー著・角川文庫、『日本の偉人100人(下)』致知出版社、胡蝶の夢(二) 司馬遼太郎著・新潮文庫)